元陸軍海上挺進隊
『中尾メモ』全文紹介
――㋹特攻艇員の日記より

中尾藤雄

一、日記のつもりがメモに

このメモを取り始めたのはこれと云った理由はなかった。本当は陣中日記にしたいと思ったけれど、作文は苦手、字は下手で知らない。しかし入隊当初は特攻隊員となること等思いもしなかったから軍隊と云う所がどんなきびしい所か、何しろ一般の世界とはかなり想像もつかぬ所であることは判っていたので、今後どこで何をするかは分からないが参考のため記録しておき度いと思っただけであった。処が教育隊半ばになって我々の任務は大変だと思った。参謀本部が考えに考えたあげく、この若手ばかりの部隊でなければ特攻隊を編成出来ない、そしてもう歴戦の勇士は次から次へと玉砕してゆく、舟は沈む、飛行機は墜ちるが生産は追付かない、最後の切札であったのが我々特幹隊であった訳である。どちらを見廻しても日記らしいものを付けている隊員は一人もない。毎日毎日訓練で疲れ、テストに追われ、敬礼一度怠ればいくつビンタが来るとも判らない。上官から命令されないものを書いていたとなれば尚更、どんな目に逢うか知れないことは皆承知していたと思う。しかし、書きかけた以上、軍の機密以外を書き残せば後に役に立つかもとの漠然としたことから始ったことで、何に使うか等全然考えてもいなかった。戦況が悪くなるにつれて、若し我々全員が戦死しても或は水上特攻隊の動きは判るのではないか、そうなれば貴重な資料になるかもとの思いから続けたのである。宮古に着いてからは筆記具の補給も出来ず、自分だけ判る程度のメモとなって仕舞って残念ではあるが、当時の状況からすればやむを得ぬことと思う。一番気を使ったのは上司に見つかったらとの心配であった。同期生の中に、若しかして中尾が毎日何か書いているという事が漏れたら取り上げられたあげくひどい目に逢うことは間違いない。人が寝てからや、一人だけの時を見計らって書いた故、日記のつもりがメモとなり、更に簡単になってしまった所以である。終戦後は余り気にすることなく記したが、いざ米軍の船で帰還するとなった時は取られる位なら焼き捨てようかとも思った。上司の方からも何でもない欲を出して物を隠し持つなど絶対するな、必ず帰還がおくれるから充分注意せよと云われていた。私は考えた。仮に取られて、もともとだ。軍法会議に廻されるような代物でもない。そしてここまでくれば一週間や十日帰るのがおくれてもと覚悟を決めて持帰る決心をした。かなりの枚数があるから一箇所に隠すわけには行かない。先ず少しを上衣の襟の中へ入れて縫い付けた。そして靴底の一部だけ離して押し込んだ。まだ少し残っている。そうだ、非常食の「かんぺんぽう」を貰ったからその中心へ丸めて入れよう。外から判らぬように小さく丸め、中心に入れて固く縛った。米軍の船中で検査はあったがそんなにきびしいものではなく無事持帰ることが出来たのである。しかし、薄い鉛筆の字がくしゃくしゃになって読みずらかったが、終戦直後は何とか解読出来たので枝葉をつけたり

りしてガリ版で仕上げた。

処がそのままのものが必要となったが、五十数年もたった今、これの解読には閉口した。いつまで見ても考えても解読出来ない処は止むを得ず飛ばしたが、大体は読み取ることが出来た。

私にとっては何よりの宝物となったわけである。

陸軍水上特攻隊とは

二、入隊まで

昭和十九年初め、若者のあこがれの予科練（飛行予科練習生）を日本全土知らぬ者はなかった大戦最中の頃、陸軍船舶兵特別幹部候補生隊（特幹隊）と云うのが出来て募集するとの情報が入った。私は、名古屋陸軍造兵廠理化学研究室に軍属として勤務し、化学分析を仕事としていた。そこに私等の様な若者が七名いた。全員が山をかけて猛勉強しこの試験に臨んだが、私だけ合格した。頭のいいやつは自信があるから検算（逆算）などやらなくて落ちたが、私は自信がないから何度もやり直し、問題全部正解で合格した。後でよく考えてみると、落着けば出来るが、やさしい問題だからと簡単にすませた者は全部落ちている。学生時代に「念には念を入れよ、落着け落着け」「これを忘れなかったら一生のうちに大きな得をする」と教えてくれた先生があった。後で思ったのは落着いてやったものだけが合格している。一言で云えば落着きのある者だけを採用したように思うと同事に、前戦で特に特殊部隊が戦闘をするには如何に落着きが大切かと云うことがこの採用の焦点であったらしい。

入隊試験から二週間程で船舶練習部（広島市）から合格通知が来た。戦後この問題を作成した人の話に依ると倍率は四十倍の応募であったとか。

第一期生約千九百名程が入隊することになった。

三、基本訓練

香川県豊浜町の紡績工場跡を兵舎に改造し、ここで軍隊の第一日が始った。一ッ星（二等兵）から上ってゆくと三ッ星（上等兵）になるのは何年先だろうと思った。しかし驚いた。軍服をいただいたら一等兵の階級章が付いていた。入隊と同時に二階級特進なんて未だ聞いたことがない。入隊者年令は十五－十八才位。少しして千九百名は小豆島（香川県）に移って訓練を受けた。歩兵は固い地面を歩くが砂の上を歩くのは何倍も疲れる。七月の終りに完全軍装（かなりの重量の物を身に着ける）で、四十度近い炎天下では軍装するだけで玉の汗が落ちるのに、そこへ防毒面を着けて走るのだから、何人が途中で倒れたことか。

出戦準備の編成で又訓練が始った。朝三時頃から猛練習を終って帰ると夜おそくなった。食わず飲まずである。三食分が用意してあるが一度に食べられるものではない。

これも終って一時休暇をいただき家に帰った。この世の別れの水盃をして母と別れ広島へ集合した。江田島でしばらく実戦さながらの訓練を行った。我々の目的は敵船団が停泊中に闇にまぎれて夜襲するのだが、一般に云われている通りならさほどの技術は必要なかろう。しかし敵船の舷（横腹）から五十センチまで近づき、しかも、それが煙突の真下（機関室のある所）を狙うとなると、暗闇で波があればそう簡単に爆雷投下出来るものではない。それを練習するため、呉の軍港に入って空母等海軍の艦船を標的に攻撃演習を行い、空母に衝突したこともあった。

この特攻艇を連絡艇と称し㋹の名で通して秘密を守ったが、我々若者を乗せる計画で十九年初め我軍部の最後の切札として考案された武器で、全ベニヤ製とだけではああ木製かとしか思われないがそのお粗末たるや船底は七ミリ、横は五ミリ、甲板は三ミリの厚さのベニヤ板である。二百五十キロの爆雷を搭載して荒波の太平洋へ出撃出来る代物ではない。甲板は骨の上へ乗らないと破れて足が落ちる危険があった。エンジンはトヨタトラック（多分三トン車の）用。始動はモーター直結のアームを踏み、アクセルに相当するものは前面の板（現在の自動車のダワンユ板）に取付けたツマミを押引きし、足踏のクラッチは離すと入り、踏んで少し横にずらすとピンに引掛ってクラッチが切れる。そして爆雷投下用の引手とハンドルがあるのみ。勿論変速も後退もないから艇の操縦、殊に達着には真剣そのものであった。

なぜ舵の近くで落とすかと云うと魚雷を考えればよい。あれも水面附近で爆発しては大した効果はない。水中を走って当るから水圧で大穴が空くのである。我々の爆雷も、舵すれすれで落として五・七メートル沈んだ処で爆発し、十六ミリの鉄板の船なら直径数メートルの穴があく計算になっていた。

四、出発

いよいよ特攻艇を輸送船に搭載し出発。所々で一時停泊はしたものの、鹿児島湾に入った。たしか十五隻位の船団だったと思う。粗製乱造の七千トン級の貨物船で、船内は蒸し暑くやっと動ける位せまい棚になっていて、一度出たらもう横になる場所がない程の詰め方だった。すぐ数日前にここを出た同数位の船団が台湾までに全部沈められたとのこと。幹部の方は大変だったと思うが、計画を何度も急に変更してスパイの眼をごまかし、突然出発命令が下った。そして魚雷や浮遊機雷をさけるためジグザグ航海をしながらケラマ諸島に辿り着いた。

民家に数名づつ世話になったが、まだここでは衣食住に関してはまあまあであった。第一戦隊はもう先に座間味へ、第二戦隊は向いの阿嘉島へ、第三戦隊は渡嘉敷島、我々は座間味島の阿佐部落に泊った。ここでは村の人も親切で、又、敵機の爆音すら聞えなかった。そして九月頃から宮古島で秘匿壕の設営に当った第四基地大隊も準備が出来た頃、二十年一月に機帆船に分乗して宮古に向った。我々と共に鹿児島を出港した他の輸送船のうち、無事台湾に着いたものは一部だったと聞く。宮古島守備に当る第四戦隊も途中でかなりの犠牲を出し、又、一部は台湾に漂着するなど宮古に着いた時には隊員も特攻艇もその数はかなり減っていた。

又、第五戦隊ー第十九戦隊は台湾及フィリッピンの守備に当った。

五、宮古島では

初めのうちはアダン林の間の草葺きの兵舎に住んでいたが、ケラマも占領され、空襲も激しくなり、皆は気付かなかったかも知れないが静かな場所へ行って耳をすますと本島を攻撃する艦砲射撃の音らしいものが遠くの雷鳴のように聞えた。

情報では敵艦船何十隻撃沈とか、○○飛行場奪回したとのニュースは入ってくるが友軍機は飛ばない。超低空で敵機が来ても弾丸を打たない。もう勝目はないかもとも思った。敵が上陸して来た時を想定して対戦車訓練が行われていた。小型のドラム缶の様なものを爆雷に仕立て、これを草むらの中から転がして出て、戦車

の前に突込むと云うのだ。又、小銃弾に細い鉄筋を取り付け、その先端には缶詰の空缶に火薬を詰めて小銃で打つ対戦車砲も出来たようだ。もうこの頃には洞窟で生活していた。明日未明上陸してくるとか、空挺部隊が下りるとかで、軍装のまま岩の壁にもたれて夜を明かしたことも何度かあった。何よりも一番恐ろしいのは食糧不足である。餓死しては犬死だ。我々は一人残らず、戦果を上げて戦死を願ってここまで生きてきたのだから、どうしてもそれまでは命が欲しかった。そのためには口に入るものは何でも確保しなければ餓死してしまう。カタツムリ、バッタ、トカゲ、蛇、ネズミ、そしてアザミやタンポポ、パパイヤの木等何でも食した。

人に話したこともないが、牛や豚等を載せた船が湾内で沈められたこともあったようだ。海岸を少し歩くと肉片が漂っている。勿論もう腐ってはいるが、脂肪は大丈夫。ここだけ切取ってハンゴウでタンポポ等草類を炒めて食った。そんなにいつも牛や豚が爆弾でやられるとは思えないが、何の肉でもよい。そうして栄養を取って出戦に備えた。又、我々は海岸に居たから敵機が海岸線を攻撃するのを待っていた。敵前上陸の時邪魔になるものを除く為に爆弾を落とす。急上昇する頃まだ小波が残っている時飛込んで、浮いた小魚を五・六匹飲み込んですぐ穴に戻らないと、今上昇した敵機が上空で方向を替えてすぐ急降下し攻撃される。この間何十秒位か。一分とはない。これに比べて陸地で生活している部隊では配給以外殆んどなく、第四基地大隊でさえ栄養失調やマラリアで多数の病死者が出ている。私もひどい栄養失調で大分長いこと洞窟で寝ていたが、目の玉が落ち込んで遠方が見えなかったことがある。味噌汁の代りに海水を薄めた塩汁にさつま芋のツル（葉や葉の柄ではない）が切って入れてあるだけで噛めるものではない。砂糖は移出が出来ないから手持ちがあったが、一度に何食分もの砂糖ばかりの菓子等、何回も食べるわけではない。それでも母と別れる時、家のことは心配するな。もうこの世で逢うことはない。お国のために働けとの言葉が忘れられず、母が持たせてくれた「六字の名号」を肌身離さずがんばって出撃の日を待っていた。その住居たるや我々の持って行く爆雷の上に板を置いて寝ていたのだから誠に物騒な話だ。そして戦死したり、重傷を負い病で倒れてゆく者のある中で命長らえたことは誠に仕合わせとしか思えない。

八月始め頃、広島・長崎に原子爆弾とか云う新型爆弾が落ちて丸焼けになったとか、それはマッチ箱位の火薬で大きなビルが吹飛ぶそうだとか、が、そんなこと信用出来る話ではなかった。

六、終戦

遂に八月十六日未明、非常呼集あり停戦と聞かされた。我々は一人残らず戦って死ぬ覚悟で生きて来たのに、何と云う情無いことを誰が決めたのかと腹立たしかったが、上司の方に、我々だけで戦うことも出来ない、早まった行動はしないよう指示に従ってくれと我々を慰めていただいたことを覚えている。

それでもまだ食糧は自給自足故、さつま芋を作り帰る日まで一生懸命働いた。

敵軍が宮古へ上陸しなかったのは日本の予測とは反対に直接本島を攻撃上陸したから宮古が大して必要なくなったからではあるが、軍隊が若し殆んど居なかったら無事上陸していたと思う。後

に聞いた話であるが上陸企画は七回あったとか。でも日本十対米軍一としても何千人かのアメリカ兵を犠牲にせねばならぬから敢えて上陸しなかったとか。若し上陸されていたら渡嘉敷程でないにしても民間人の自決者は何人かは出ただろう。幾多の犠牲はあったが、一人の自決者もなかったことは苦しかった中にも少しは喜ばねばならぬと思う。

私はこうして戦友達の盾と神佛のおかげで、無かった筈の命をいただいて帰れたと思っている。であるから我々特攻隊員戦波者千数百名のためにも出来る限りのことはしなければ申訳ないと思い、今後も何かお役に立ちたく努力する覚悟である。

今も戦死した友の姿は頭に焼付いていて終生忘れることは出来ない。

そして今の幸福を感謝しつつ余り少い人生を送っている。

合　掌

平成十年二月二十五日

まえがき

私は幼少から現在に至るまで一番苦手な事は作文と字を書くことである。それが今の処眼病が進み、視力が極端に落ち、神経系の病気で特に手のしびれがひどく、何とか読み取ってもらえる字を書きたいと思っても益々指先が動かなくなり、封筒や祝儀袋等の表書は必ずアルコールを注いでからにしている状態である。

このメモは作戦計画等、軍の機密に関する事項は記してない。その理由は若し戦闘中に敵にこれを奪われた場合を考えたからである。しかしメモを取って来た理由は、我々特攻隊員は一人たりとも生還などあるわけはないと信じていたから、我々の行動等について皆目判断出来ないことになるのを心配した所以である。戦場にあっては鉛筆も石で摺って使用し、又帳面も戦中のこと、紙質は悪く補給もつかぬままに記した故、五十数年を過ぎた今、これを書取るのは容易ではなかったが、一部を除き大体読取ることが出来た。誠に恥づかしい文字ではあるが、当時そのままの文字及び文章で記した。文中判断しにくい処も多いが、上官に見付からぬ様に書いた故、自分だけ判ればとの理由もあって時間を惜しみ略した箇所も多くなった。大発＝大発動艇、舟整＝舟艇整備、A＝空母、B＝戦艦、C＝巡洋艦等である。又情報＝とあるのは上官から聞いたものをそのまま記した。我々の特攻艇は極秘中の秘であったからこれを連絡艇と称し㋹と呼んだ。又当時の金額で一隻を造るのに千円を要したことから千円の棺桶とも云われた。

尚、かなりの日数が欠けている所が続いているが、多分猛特訓中か、外洋に出ていたり、病中であったのだと思う。

何分誤字、当字、送り仮名の違い等多いと思うけれども何とぞ御容赦願いたい。

昭和拾九年四月

九　日　二十二時宇品丸ハ我々一行ヲ乗セテ宇野港ヲ出タ。此ノ夜ハ寒ク数時間ノ航行ニモ満足ニ眠ルコトガ出来ナカッタ。

十　日　朝眼ヲ開クト物珍ラシゲニ甲板ニ出タ。コレハ香川県豊浜町ノ沖デアッタ。始メテ大発動艇ニ乗ッタ時ハ何トモ云ヘヌ感ジガシタ。近クニ見エル古イエ場ノ如キモノガ兵舎ト聞イテ驚イタノモ無理ハナカッタ。営庭ニ国旗ヲ肩ニシテ竝ンダノハ午前十時頃ダッタ。フト目ノ前ニ現レタ岩井ハ夢ノ様ダッタ。今マデ

同じ造兵廠ニ居テヨク知ッタ仲デアルノニ、二人共特幹、試験ヲ受ケタ事サヘ知ラナカッタノダ。ヤガテ編成ガ終り各兵舎ニ入ッテ軍服ト着替ヘタ時ハ自分モ今カラ軍人カト嬉シクナッテ何カ落付ノナイ様子デアッタ。職友デアル岩井・佐竹モ三中隊デアルト聞イテ安心シタ。サテ軍隊最初ノ晝食トナッタガ誰モガ知ラヌ者バカリ故、互ニ目ト目ヲ見合ハセテ居ルノミデアッタ。入隊式ガ行ハレタ。軍帽ヲ頭ニ載セタトキハ一度ニ大人ニデモナッタ様ナ感ジガシタ。式中ニハ司令官閣下・練習部長閣下・部隊長ノ訓示ガアリ、我々ノ希望ハ益々遠大ナモノトナッタ。入隊当時ノ訓練ハ各個教練ガ主デ時ニ手旗等ヲ習ッタ。

十七日　中隊長（藤嶺中尉）最初ノ精神訓話。

一、有形無形的環境ヲ整理シ以テ精神要素ヲ絶対的ニ涵養シ厳粛ナル軍紀二千與セシム。

二、各自ノ素養及素質ヲ活用シ切磋琢磨、自他共ニ向上ノ良風ヲ養成ス。

三、悠遊和楽ノ間ニモ形状礼節ヲ辨ヘル成人タラシム。我々ハ全員デ新兵舎移動ノ準備ヲ行ッタ。舎内ノ掃除・蒿蒲団運ビガ主ナモノデアッタ。

十九日　新編成ヲ行ヒ新兵舎ニ移動シタ。皆辛苦シタ所デハアッタガ新タマッタ様ナ感ジガシタ。

二十一日　今日マデ無キモノハ分チ合ヒ苦労ヲ共ニシテ来タ戦友佐竹ハ悲シイカナ病気ノタメ帰郷シタ。彼ト分レテカラハ彼ノ心ヲ思ヒヤリ二人分モ働クゾト誓ッタ。

二十五日　慰霊祭。靖国神社遥拝式。

二十九日　天長節。野村嘱咤ノ精神訓話＝楠公ノ忠義。

三十日　観音寺ヘ行軍。忠魂碑・琴弾神社参拝。

最初ノ行軍デ皆喜ンデ、途中ハタンポポや紫雲英ガ美シク咲イテ、故郷ノ田舎道ヲ歩イテ居ル様ナ感ジガシタ。

五月

六日　他中隊ニ伝染病ガ発生シ全員防疫ニ努力スルコトトナッタ。病原ハ主トシテ甲幹隊ト聞ク。

八日　大詔奉戴式ガ終ッテカラ、昨日ノ注射ノタメ営庭デ倒レタ。熱ハ一日ノミデ治ッタ。

十二日　精神訓話（野村嘱咤）団体ノ精華ニツイテ。

十六日　中隊長精神訓話。忠節（死生観）

◎浜マデハ海女モ蓑着ル時雨カナ。

十八日　最初ノ衛兵勤務ニ服シタ。南門デアッタガ皆張切ッテ居ル故服務ハ厳正デアッタ。

六月

一日　中隊長精神訓話。武勇。

◎勇気トハ信念ヲ貫ク意気ノ力。

四日　八時出帆。舟内ハ暑ク班長勤務ノタメ今マデニナイ苦労ヲシタ。将来部下ヲ持ッタ場合ヲ深ク味ハッタ。懐カシイ豊浜ヨサラバ。甲板ニ出レバ漁夫達ガ手ヲ振り人影ガ消ユルマデ見送ッタ。途中ハ実ニ、何時カ小学校ノ読方デ習ッタ如ク、島カト見レバ崎、崎カト見レバ島、点々ト帆舟ノ浮ム様ハ実ニ筆舌ニ盡シ難イ。

五日　上陸地点ヨリ兵舎マデ元氣ナ軍歌演習ヲ行ヒ町ノ中ヲ通ッタ。軍隊が何回モ来タコトガナキ爲カ、島民ハ笑ヲ浮ベテ歓迎シテクレタ。

六日　八幡神社ニ参拝シタ。山頂マデ競走デアッタガ、自分

ハ残念ナガラ二番目デアッタ。八幡山ヨリ四方ヲ眺メタ時ハ何処モ此処モ国立公園ニ相違ナカッタ。殊ニ美シイト感ジタノハ直グ下ニ見エル、小屋ガ一軒立チサウナ小豆島（アヅキ島）デアッタ。遠クニ見エル八島。飛行場ニデモナリサウナ平ラニ出来テ趣味アリ。何百年ノ昔ヲ思ヒ浮ベタ。

九　日　最初ノ外出日トテ色々教育ヲ受ケ、正午ヨリ十七時マデ町デ遊ンダ。

十　日　部隊長巡視。主トシテ内務班ノ状態。

十二日　四時起床。池田湾ニ向ヒ大発機動。湾内デ達着演習ヲ行フ。晝食ハ小高イ山ノ涼シイ所デ行ッタ。コノ町ヘハ未ダ軍人ガ来タコトナキ故、大歓迎デ名産ノリンゴ等頂イタ。

十四日　第一組ノ班長トシテ豊島ニ向ヒ、大発機動演習ヲ行ッタ。コノ部落ノ人モオ茶ヤ豆等持ッテ来テ我々ニ宣シク頼ムト云フ様ガ現レテ居タ。一艇（原区隊長）ハ岩ノ上ニ乗リ上ゲテ船底ヲ破リ、乗員ハ容器ト云フ容器ヲ用ヒテ汚水ヲ汲出シタ。

十六日　下士官一、候補生数名ガ先日ノ大発ヲ修理シタノヲ受取リニ行ッタ。

十八日　司令官閣下、練習部長閣下ノ査閲ガアッタ。終ッテカラ閣下ニ船舶兵体操ヲ見セタ。閣下ノ訓示中「高野道有ノ心ニナレ」ガ強ク感ジタ。

十九日　正午ヨリ班長勤務ヲ命ゼラレタ。皆ハ書間モ勉強スルノニ、自分ハ一日ノ務メガ終リ、消燈后シカ出来ナイノデ全ク自信ヲナクシタ。

二十日　部隊試験ガ行ハレタガ、試験場ノ設備デ勉強スル様ナ假ハ一分モナカッタ。

二十一日　体力検査・身体検査ガアッタガ非常ニ低下シテ居タ。

二十三日　完全軍装ヲシテ小豆島一周ヲ目標ニ舟艇機動ヲ行ッタ。土床港ニ各大発ハ舷々模合ヲナシ、注意ヲ終ッテ艇隊航行デ小部ニ向ッタ。此所デ晝食ヲ取リ十四時出発、十七時頃橘ニ到着。中隊ハ直ニ露営準備。区隊毎ニ幕舎ヲ作ッタ。沖ノ方ヲ航空母艦ラシイモノガ二隻程通過シタノハ珍シカッタ。日モ暮レカケタ頃、所々デ光ル夜光虫ガ不思議ナモノニ感ゼサセラレタ。夜ハ園芸会ヲ実施。島民ハ面白サウニ黒山ノ様ニ見物ニ来タ。夜十時頃出発。苗羽ニ向ッタガ波高ク航行ハ困難デ、始メハ舟艇ガ沈ム心配デアッタガ、其ノ中ニ心持ガ悪クナリ何モ分ラズ一時間位ハ過ギテ仕舞ッタ。某燈台ヲ通過シテカラ海上モ静カトナリ夜明ト同時苗羽ニ着イタ。朝食ハ気持ガ悪ク出来ナカッタ。一日中此ノ附近デ砂浜達着ノ練習ヲヤッタ。午后三時頃水泳ヲシタ心持良サハ忘レルコトガ出来ナカッタ。夕食后ハ区隊長ノ手旗訓練ガアッタガ未ダ練習ノ足ラヌ我々ハ島ノ子供等ガヨク読ムノヲ見テ感心シタ次第デアル。其ノ夜ハ大発ノ中デ就寝シタ。二十五日ノ朝ハ土床港ヘト艇ヲ進メタ。途中ハ地図ヲ開キアノ山ハ之、此ノ部落ハ此所ト合ハセテ居ルノガ楽シミダッタ。

半バ航海ヲ終ッテ池田港マデ来タ時、オイルノ管ガ切損シ一時漂流シタガ、東軍曹ガ修理シ、池田湾ニ艇ヲ止メ晝食ヲ取リ帰路ニツイタ。中途デ一万トン級ノ客船ニ出遭ヒ大波ヲ受ケタ。土床港ニ着イタ時ハ一回ノ戦斗ガ終ッタ様ニ感ジタ。

島ノ風景ハ我々ノ心ヲ清ラカニ広大ニナラシメ、数多クノ島々ハ実ニ我々ノ舟艇訓練ヲ援助シテクレタ。住民ガ我々ヲヨク歓迎シテクレタノモ軍隊ノ嬉シサダ。土民ノ生活ト云ヒ、又言語、動

作マデガ島国ニ育ッタ彼等ハ実ニ日本民族ノ象徴デアル。
二十七日　非常呼集ガアッタ。中隊三百餘名ノ中一番ガ岩井候補生、自分ハ五十六番デアッタ。
三十日　外出日。小畑候補生ト附近ノ山ニ行キ晝寝ヲシタ。
三十一日　兵器手入不良ナルタメ区隊長ヨリ呼バレ、衣服ヲ脱セラレ家ニ帰レト云ハレタ時ハ母ヲ思ヒ出シ涙ガ出ザルヲ得ナカッタ。

八月

一日　部隊兵器検査実施。
四日　土床小学校デプールヲ借リ水泳訓練ヲ実施。潜水ハ自分ガ一番長カッタ。
七日　訓練火災呼集。（五時）
十二日　第六区隊ニ編入（辰巳少尉）
十三日　九日ヨリ下痢ノタメ診断ヲ受ク。（練兵休）
特攻艇ノ学科ヲ受ケテ我々ノ将来ヲ考ヘルト特幹一期生ト選バレタコトヲ実ニ幸福ト感ジタ。
十九日　我区隊ノミ大発デ牛窓（岡山県）ヘ夜間航行ヲ行ッタ。
羅針盤ノ有難サト云フモノガツクヅク感ゼラレタ。
二十日　金子隊第一中隊ニ編入。式ノ終ッテカラ八幡神社ニ参拝シタ。高イ鳥居ノ上ニ載ッテ居ル数個ノ石ヲ見テ、我々ノナスコトハアノ鳥居ノ上ヘ石ヲ載セルヨリモ未ダ難シイト中隊長ガ云ハレタ。今日ハ自分ノ誕生日デアル。十九才。
二十一日　松岡少尉指揮ノ下、晝食携行単艇デ屋島ニ行ク予定デアッタガ、小瀬海岸デ何回モ機関ガ故障シ結局小瀬デ止ッタ。岩井候補生ノミガ汗ト油ニ体ヲ黒クシテ故障ヲ排除シタノハ松岡少尉始メ全員ガ実ニ感心スル所デアッタ。
二十三日　副班長勤務ヲ命ゼラレル。班長勤務ハ岩井候補生。
二十四日　朝ヨリ連絡艇ノ演習ヲ見学ニ行ッタ。SS艇ノ上ヨリ攻撃状況ヲ見タガ、海軍魚雷艇モ交ッテ演習スル様ハ実ニ物々シカッタ。
二十五日　我々ハ入隊以来基礎教育及舟艇教育ヲ受ケ、愈々本日卒業式ヲ行ッタ。夜ハ舎内デ各中隊毎ニ楽シイ会食ヲシタ。亦、本日付デ上等兵ニ進級シタ。他ノ中隊ハ休暇デ帰省シタ。
二十七日　大正丸デ我々金子隊ハ豊島演習基地ニ向ッタ。基地ハ人気ナイ（湾内ニ幕舎ヲ作リ、連絡艇多数、装甲艇二隻、基地整備及充電設備モアリ、本日ヨリ三日間夜晝ナク訓練スルコトトナッタ。主トシテ運転法ヲ教育サレタ。機関ノ故障ハ一日ニ数回乃至十数回ニ達シタ。

九月

十日　休暇。小畑候補生ガ話シ相手トナッテ来タノミダ。汽車ハ岡山ニ向ッテ走ッタ。北ニ進ムニツレテ山ノ樹木モ太クナッテ来ル。自然ニ眠ッテ仕舞ッタ。大分高イ山ノ間ヲ過グルノニ気ガ付イタトキハ、モウ岡山駅ヲ越シテ四・五十分ニナッタ所。汽車ハ駅モナイノニ何度モ止ル。時計ヲ見ルト約二時間程遅レテ居ル。列車ガ長イモノナラ走リタイ様ナ思ヒダ。此ノ分ナラ岐阜駅ニ着クノハ二十四時。スルト電車ハモウナイカラ家マデ歩ケバ明朝ノ二時半ト考ヘルト何カ心配ニナッテクル。家ノ者ガ知ッテ居レバ自転車デ迎ヘニ来ルカト思ヒ、小畑候補生ガ大阪デ降リルカラ電報ヲ頼ンダ。姫路モ過ギ影色ノヨイ須磨・明石附近モ早ク去ッタ。大阪駅ニ到着シタトキハモウ日モ暮レテ居タ。電報ヲ頼ムト

小畑候補生ニ別レタ時ハ後数時間デ家ニ着クト思フト自然嬉シサガ表ハレテクル。京都マデハ短カカッタ。何時モ京都参リハ三時間汽車ニ乗ルト云フカラ安心シテ眠ルコトサヘ出来ナカッタ。彦根ト云フ声ヲ聞イタトキハ、ウトウトシテ居タガ、佐竹ノコトヲ思ヒ出スト彼ノ不幸ナコト、自分ノ幸福ナコトト頭ニ浮ベタ。丁度此頃点々トシタ灯ガ湖水ヲ思ワセタ。何時モ故郷ノ冬ニ雪ヲ下ス伊吹モ通リ越シ大垣ノ駅ニ到着シタ時ハモウ数時間后ニ母ト面会出来ルト云フコトガ明ラカニ眼ノ前ニブラ下ッテ居ルト思ヘバ安心シテ眠リニツケナカッタ。家ノ前ヲ流レル清イ長良川ノ下流モ渡リ、岐阜ノ街ニ入ッタ時ハ嬉シイヤラ、兄ハ迎ヘニ来居ルダロウカト云フ心配ヤラ何カ落着ガナカッタ。ホームニ足ヲ下シタトキハ「故郷ヲ只今」ト云フ様ナ心持ダッタ。同期生モ加賀・岩井・信包ト居テ岩井以外ハ岐阜駅デ下車シ、明朝ノ汽車及電車ヲ待ツ様子ラシク、自分ノ家ガ近ケレバ来テ泊リタイ様子デアッタガ現在ハ二十四時、三里ノ道ヲ歩イテモ労レルノミダト思ッテ止メサセタ。大阪駅デ電報ヲ出シテアルカラ兄ハ自転車デモ持ッテ来テ居ルト思ッテ駅内ヲ数度捜シタガソレラシイ姿モ見エナカッタ。ガ乗物ハ何モナイ。歩ケバ二時半ニハナルダロウト思ヒ、若シ途中デ兄ト会フカモ知レヌト云フ事ヲ楽シミニシテ右側ヲ歩ミ始メタ。自転車ガ来レバ兄カトヨク見張ッタガ、遂ニ家ノ前ニアル橋ニカカッタ。我ガ家ノミナラバ大声デ呼ンデ見タイ様ナ気持ダッタ。部落ノ中ヲ通ルノハ夢ノ間。入口ヲ明ケントシタガ錠ガ下シテアル。座敷ノ方ヘ廻ッテ母ヲ呼ンダ時ハ呼ブ声モ答ヘル声モ普通ノ声デハナカッタ。母ハヨロメキ出テ来テ戸ヲ明ケタ。五日ノ間ガ二・三年ニモ感ゼラレタ。軍隊ノ話ヲ次カラ次ヘト持出シタガ、何時間アッテモ足リサウニナイ。モウ時計ハ四時ヲ指シテ居ル。母ノ手製ノ代用食モ出来タ。又明日ト空腹ヲ之デ満足シテ床ニツイタ。

昨夜ハ蒿布団ニ毛布。今宵ハ畳ニ絹布団。何カ落着イテ眠リニ就ケナイ様ダッタ。目ヲ覚シタ時ハモウ九時。母ハ何処カヘ行ッテ居タ。母ノ来ルノヲ待ッテ晝食ヲ持ッテ名古屋ヘ出発シタ。名古屋二年間生活中一年半世話ニナッタ永坂ノ宅デ一寸挨拶致シ軍隊ノ？話モ数時間ニ及ンダ。晝食ヲ終リ造兵廠ノ門ニ行キ会計課ニ居ルベキ岩井候補生ヲ呼出シ集合時ノ列車ノ時刻ヲ定メテ別レ、次ハ懐カシイ技術課試験室ノ先輩風間君ニ面会、約一時間昔ノ話等シテ熱田駅ヨリ帰ッタ。熱田駅ハ入隊前ヨリ著シク変化シテ居タ。

十二日　我市内ヲ歩キ廻ッタ。百貨店等入ッテ見タガ僅々五ヶ月間ニ之程物資ガナクナッタカト驚イタ。雨天デアッタガ晝ヨリハ隣及親戚ヲ挨拶シテ歩イタ。帰宮マデハ他ノ者ト逢ヒ、家カラ一歩モ出ズ身辺ノ整理及最モ親シイ電気ト共ニ暮シタノニハ母モ兄モ隣ノ人モ不思議ニ思ッテ居タ。母モ兄モ何カト御馳走シテクレタガ遂ニ帰ル日ガ来タ。夜八時頃ノ汽車ニ乗ッテ家ヲ去ッタ。見送ル者、見送ラレル者、之ガ此ノ世ノ別レト思ッタノハ実際デアル。家ヲ出ル時必ヅ御国ノ為ニ成レト云ハレタ事ヲ汽車ノ中デ思ヒ出シテハ固ク心ノ中デ誓ッタモノガアッタ。

帰路モ同ジク約一時間程遅レタガ広島ヘ無事到着シタ。

十四日　ソノ時ハ十四日ノ正午頃、先ヅ練習部ヘ荷物ノミ置イテ附近ヲ見物スル目的デ市電ニ乗ッタ。丁度浜本少尉殿ト会ヒ、練習部ヘ行ッテモ駄目ダト云ハレタ時ニハ悲観シタガ、ソノ附近

デ一軒ノ宿ヲ求メ書食ヲ終リ厳島神社ニ参拝シ、夜ハ隣ノ映画館へ入ッテ暮シタ。

十五日　夜ハ此ノ家デ泊リ、十五日ハ何カト整理シテ正午ニ練習部へ行ッタガ誰モ来テ居ナカッタ。十三時ニハ全員集合シテ十五時頃夕食ヲ終リ桟橋ヨリ大発デ江田島幸ノ浦ト云フ部落ノ海岸ニアル兵舎ニ到着。直チニ兵舎ニ入リ兵器・被服・陣営具等ヲ受領シタ。営内ニハ倉庫ノ改造ラシキモノガ十数モ竝ンデ居タ。

十六日　直チニ演習ハ開始サレタ。豊島ノ如キモノデハアッタガ日課トシテノ訓練デアリ舟艇ノ揚陸位ガ寒クテ苦シイノミデ、本船ノ攻撃等其ノ他艇隊航行モ皆喜ンデ出タ事モアッタ。

訓練モ大分変ッテ来テ、途中我々第二群ヘ大発動艇ヲ一隻受領シタ。大発ハ木製デトヨタ機関二台備ヘテ居タガ故障ハ多ク一台ノ機関ノミデ航行シタ事ガ大分アッタ。乗船モ近ヅキ訓練モ大体終リ大発デ附近ノ島部落ヲ廻ッタ。或ハ行軍モヤッタ。

十月

一日　幸ノ浦部落ヲ登リ海兵ノ横ヲ通過シテ切串ト云フ部落ニ到着、直チニ学校ヘ行キ宿舎ヲ割当テラレ、加賀・壮司ト三人デ石田方ヘ世話ニナッタ。本家ハ既ニ予科練ニ入リ大手柄ヲ立テ、名誉ノ戦死ヲ遂ゲラレタノダ。我々ハ英霊ヲ拝ミ、其ノ后色々ト御馳走ニナリ十時頃帰営準備ヲシテ学校ニ集合シタ。帰路ハ真暗デ小高イ山ガ何箇所モアリ苦労シタ。

二日　二日ノ夜ハ室尾ノ奥窪方ニ（信包・加賀）

十五日　下鎌刈島村デ書食ハ寺デ、夕食ハ向浦ノ谷村方ニ世話ニナッタ。（？？？？）

十一月

一日　新ラシク舟艇ヲ受領スルタメ大発デ宇品港ヘ行ッタ。我々ハ数名残リ舟艇ヲ係留スルタメ「ブイ」ヲ作ッタ。之ハ軍属ノ石田隊ガ兵舎ノ前、深浦ナル所デヤッタ。新井・加賀ト三人ハ我友ガ舟艇受領デ苦労シテ居ルニモカヽハラズ、内務班デ横ニナッテ居テ群長ヨリ御注意ヲ受ケタ。入歯ガ抜ケタノガ気ニカヽル。

二日　舟艇監視ヲ九時ニ交代スルタメ連絡艇ニヨリタイビニ行キ、山ヲ越シテ保浦ニ到着。石田隊ノ一室ヲ借リテ監視ニ着イタ。控ヘノ場合ハ附近ノ山ヲ探シテ甘藷ヲ買ヒ、又ハ海岸ノ家デ乾魚等買ッテ自分デ料理シタノモ面白カッタ。

舟艇整備ノ場合ハ監視ニツイタモノガ幸ノ浦ヨリノ連絡ヲシタ。第二回目ノ監視ノ時、群長以下ヲ幸ノ浦ニ送ッタ帰リ、深浦ニ到着スルヤSBラシキモノガ呉ノ方向ニ走ッテ居ル。全速デSBニ近ヅキ見学シタ。約十三ノット位デアッタガ航空母艦ヲ追ヒカケタ時ハ十六～七ノット位デアッタ。乗船マデハ主ニ舟艇整備ト時ニ艇隊航行・攻撃デアッタガ軍艦等ヘノ攻撃演習、輸送船等ヘノ夜間攻撃ハ一種ノ楽シミガアッタ。

十六日　早朝大発トヤンマニヨリ日昌丸ニ到着。午后舟艇搭載ス。

十七日　九時出港。三時ニ門司到着。日昌丸ヨリ港発。彦島ニ十一時着。学校ヲ整理ス。十九－二十二時荷物監視。

十八日　七時起床。八時半ヨリ軍装検査。九時ヨリ内務衛兵。

十九日　午前フトンヲ町内ヨリ借リル。午后假眠ス。

二十日　山口・福岡県八時帰省。九－十六時舟艇整備。入浴。

二十一日　午前休ム。空襲アリ。防火班トナル。十一時二十分解除。午后舟艇整備。防舷物取付。

二十二日　午前舎内外掃除。午后引率外出。映画「かくて敵は撃

退せり」「土俵祭」九時帰営。
二十三日　九時ヨリ舟艇監視。（川上以下五名）夜ハ舟艇ノ中。
二十四日　七時点呼報告。九時交代。舎内清掃。他ハ本船ヘノ搭載。二十時完了。
二十五日　晝食持参。係留場海没艇（30号・63号艇）ヲ揚陸。他ハ本船ニ係留ス。
二十六日　本船ヘ舟艇搭載。但自分ハ食事当番デ残ル。合田兵長ト菓子ヲ本船ヘ取リニ行ク。
二十七日　本船デ舟ヲ三番ハツチニ搭載ス。雨デヌレタタメ機関室デ乾燥。舟艇整備。
二十八日　艇二十九隻三番ハツチニ搭載。十五時終り、十九時半出港。対潜監視。三十分デ止ル。
二十九日　波高シ。五時出帆。十四時監視交代。十七時ヨリ退避訓練。長崎西北停泊。
三十日　四時出発。晝食時退避訓練。午后体操・手旗訓練。（護衛艦三隻・飛行機二機）
三十一日　天草附近デ停泊。

十二月

一　日　早朝出発。午前モールス練習。二十時鹿児島着。（半島廻る時波高シ）
二　日　鹿児島湾デ停泊ス。午后軍歌演習・体操ヲ行フ。
三～五日　毎日軍歌・体操・手旗・モールス練習位デアッタ。
六　日　昇降口ノ屋根作リ又体操・軍歌。十五時出帆予定ガ遅レタ。
七　日　刀ガ錆ビタ故午前中手入。午后検査。
八　日　正午ヨリ大詔奉載式。
七・八・九日ハ敵モ最モ我ニ目ヲ附ケテ居ル関係上警戒ヲ厳重ニシタ。
九　日　十四時ヨリ衛兵。十五時鹿児島出港。駆逐艦二隻。
十　日　服務状態悪イト三中隊長ヨリ御注意ヲ受ク。
十一日　船ガヨク揺レ、心持悪ク何時モ眠ッテイタ。十四時ヨリ対潜警戒。
十二日　十九時本船ハキャラマ泊地デ停泊シタ。
十三日　風雨強キタメ舟艇ノ破損箇所点検。
十四日　五時起床。二・三番ハツチノ艇ヲ下ス。十四時終リ十五時大発デ海岸着。同船団出発。物品監視服務。日没頃大常丸入リ、我ニ手旗デ連絡シタ。我々ハ本部ヘ連絡。
十五日　〇～四時糧秣運搬。
十六日　毎日計画ニヨリ教育・訓練。
二十七日　倉庫監視。
二十八日　衛兵下番。バッテリー充電ニ座間味ヘ行ク。
午后軍力検査。野球。
二十九日　一部バッテリー受領及運搬。機帆船ニ物品ヲ搭載ス。
晝食ハ乾麺包。午后薪取リ。
三十日　午前ザマミヘ食糧ヲ取リニ行ク。午后薪取リ。
三十一日　還境整理。午后薪取リ。

一月

一　日　新年。八時半ヨリ拝賀式。九時ヨリ舟艇監視。
二　日　休ム。午后第一戦隊ト野球試合。優勝。
三　日　糧秣ノ一部本船ニ搭載。午后入浴当番。十八時ヨリ部

落ノ人ト会食及演芸会。
四　日　毎朝舟艇ヲ整備。一日中薪取リ。
五　日　八時半第三群舟艇搭載援助。十六時終了。二十三時マデ家ノ人ト遊ブ。
六　日　毎日薪取リ及茸取リ。十一日迄。
十二日　八時ヨリ艇搭載。二十一号艇調子ヨシ。網ガ切れ漂流。
十三日　九時ヨリ各舎ノ清掃。十二時太田黒群長巡察。午后薪取リ。
十四日　薪取り。
十五日　午前薪取リ。十四時ヨリ大発デドラム罐搭載。
十六日　午前点呼場デ遊戯。午后薪取リ。阿佐部落ノ祭リ。
　衛兵勤務。
十七日　午前夫々家ノ手伝ヒ。（米搗）夕方ザマミヨリ糧秣受領。
十八日　午前薪取り。午后炊事デ米搗、後ニ乗船。二十一時興国丸ニ乗ル。
十九日　三時出港。波高ク久米島ヘ十時着。停泊。
二十日　九時久米島出帆。船団ハSEヘ進ンダ。十四時木材ヲ潜望鏡ヲ見タ。
二十一日　波モ昨日ト同ジク少カッタ。書ニナッテモ島ガ見エズ、我ガ船ノミ機帆船団ノ後ヲ行ッタ。他ノ船ハSニ向ッタ。十五時頃島影見。二十一時頃海岸ニテ停泊。竹丸空襲ヲ受ク。
二十二日　朝ニナレバ石垣ー気付キ出帆十時頃●ノ湾ヘ入ッタ。朝ヨリ風強シ。
二十三日　朝ヨリ風強シ。午后数名ガ近クノ部落ヘ連絡ヲ頼ミニ行ッタ。
二十四日　風雨強キタメ舟ノ中デ暮シタ。夜半イカリノワイヤーガ切レタ。
二十五日　書頃伝馬舟デ軍曹二人来テ本船ヲ宮古ニ廻スベシト。
　先ヅ町港ニツイタ。
二十六日　正午先日ノ軍曹連絡ニ来テ舟ヲ宮古島ニ廻スベシトノ故、航空隊ノ一部ノミ残リ他ノ舟ニ乗リ移リ、日暮ニ先ヅ二十四日マデ入ッテ居タ港ヘ入ッタ。
二十七日　海荒レル。朝ハ機帆船ガ大分入リ擬装シテ居タ。夜ハ演芸会。
二十八日　風強シ。イカリ切レタ。日暮島民ガ我舟ヘ避難シタ。
二十九日　風雨益々強シ。
三十日　午后天気ヨクナリ発電機ノ手入ヲシタ。又船員ハ水ヲ補給ス。
三十一日　十二時出港。割合波多シ。タラマ通過ノ際ハ石垣ハ淡クナッタ。十五時宮古島発見。平良数キロ北方ヘ二十一時着。停泊。

二月

一　日　風ナシ。九時出発。平良港第三桟橋ニ来タ。十四時上陸。兵舎ニ来タ。
二　日　朝舟艇整備（機関ノ水通シ）午后被服検査。
三　日　上野ト二人デ辺水ノ連絡ヲトリニ宮古丸ヘ行ク。午后体操。二十時ヨリ辺水。
四　日　午前モールス。午后礼式令学科。
五　日　八時半機関短銃操法。十時十五分コンソリ一機空襲。
　午后内務清掃。

六　日　午前聖?伝達式。内務実施。午后休養。
七　日　九時ヨリ衛兵。
八　日　冬服受領。十三時ヨリ米英軍常識ニ関スル学科。
九　日　午前勅諭奉読法。午后釣竿ニ注記。
十二日　船体及機関ノ点検修理。
十三日　舟整（晝食）始動ヲナス。
十四日　八時出発準備完了。八時半出発移転。午后当番小屋造り。
十五日　一日中爆雷投下機ノ取ハヅシ。（敵ハ十八日頃上陸ノ見込）
十六日　燃料補給。16・18・19・21ノ四艇ヲ第二陣地ニ廻送ス。
十七日　舟艇整備。（爆雷投下機ハヅシ）
十八日　群長ヨリ注意ヲ受ケ海岸デミソギヲシタ。舟整。
十九日　午前第二陣地艇ノモービルヲ代ヘ、午后ハ他ノ艇。
二十日　午前第一陣地艇ノ船体清掃。午后各艇ノ整理。
二十一日　休養。正午入浴当番ニ晝食運搬。入浴。
二十二日　午前発電機手入。機関学科。午后毛布被服ヲ干ス。体操。
二十三日　水路視察。大発ニテ行ク。B24十二時空襲五回。
二十四日　午前舟整。午后環境整理。十六時ヨリ五名ノ告別式。
二十五日　午前舟整。午后休養。
二十六日　午前舟整。午后競ギ・遊ギ。
二十七日　午前手旗。基本訓練。午后舟整。
二十八日　午前手紙ヲカキ、午后ラグビー。

三月

一　日　午前舟整。朝グラマン二機、東方ヨリ本船ヲ攻撃ス。十六時ヨリ一時間、本船其ノ他ヲ約三十機グラマン・雷撃機攻撃。
二　日　敵機動部隊近クアリ（南東三〇〇キロ）退避準備ノタメ服装ヲ整ヘテ待機シタ。十六時ヨリ告別式。（池田中尉以下）
三　日　空襲警報ハ続イタ。正午ヨリ洗濯。十八時半ヨリ17・22・23・24ノ四艇ヲ第二陣地ニ移ス。二十三時終了。
四　日　各々舟艇ノ擬装ヲ行ッタ。
五　日　午前舟整。午后?遊（浜デ遊ギ）
六　日　午前舟整。午后入浴準備。
七　日　本日ヨリ五時起床シテ三十分デ退避準備完了スルコト。午前退避。午后ラグビー。
八　日　七時ヨリ奉読式。後火ヲ囲ミ雑談。午后モールス。
九　日　中隊毎ニ畑ヲ分配シ耕ス。
十　日　〃　〃　（炊事ノ南）
十一日　〃　〃
十二日　本日一時四十五分佐藤戦死シタルタメ病院ヘ行ク。十九時英霊安置。
十三日　午前草刈り及灰運搬。豆マキ。午后水汲ミ。十八時ヨリ告別式。
十四日　草刈り。耕土。
十五日　耕土。
十六日　耕土。
十七日　午前各艇ノ始動実施。午后入浴。
十八日　午前ゾウリ作り。午后ハ退避準備。貝取り。
十九日　午前体操・手旗。午后舟整。
二十日　学科及耕土。
二十一日　舟整。

二十二日　午前中隊長精神訓話。
二十三日　退避ス。八時半空警発。B29一機　イラブ飛行場上空ヲ航行。
二十四日　七時半㊀発。コルセヤ・グラマン十五機平良港爆撃。
二十五日　午前兵器検査及清掃。午后退避。
二十六日　昨夜二十三時ヨリ四時半マデ？板造り。六時半㊀発。コルセヤ・グラマン。八時防護警報入ル。十時（一機撃墜）十二時・十五時飛行場・港爆撃。
二十七日　五時ヨリ甲戦演習。装具ヲ第二陣地ニ運ブ。十時～二十四時辺水。八時（十数キ）十時及十六時（四十キ）イラブ飛行場・港爆撃。
二十八日　起床八時。午前ハ擬装。午后舟整。十三時㊁発。敵機ナシ。
　情報＝二・三日前舟艇百隻・千数百名ガキャラマ上陸。
二十九日　整備及擬装。装具整理。入浴。㊁ノミ。
三十日　整備。十一時半29一機上空偵察。本島、現在有力ナル敵艦隊・航空部隊近接シ砲爆撃サレツツアリ。駆逐艦ハ千米沖ヨリ。
三十一日　朝食マデモールス。午前学科及モールス。二機グラマン爆撃。午后体操・農耕。四キグラマン港爆撃。飛行場牽制。

四　月

一　日　朝友軍キ上ル。八時マデ農耕。？？？具監視。午前環境整理。十三時ヨリ被服検査・整理。身体検査（練休）本島附近50沈砲。
二　日　朝二十三機港爆撃。午前休ム。午后農耕。
三　日　警報発令。午前タコツボ掘り。十二時半頃食事中艦爆。十八時解除。（延三百機）
四　日　環境整理。舟整。数キ二・三回来タノミ。
五　日　洞窟掘り。五時半ー十七時マデ㊁。炊事附近小型二コ。（延二百機）
六　日　六時半㊁。午前洞窟掘り。数回ニ亘リ爆撃。
七　日　六時頃ヨリ数十回ニ亘リ四機基準トシ爆撃ス。
八　日　五時半ヨリ数回ニ亘リ二・三十機、町・海岸線。夜間一ー二機照明弾。ロケット弾使用数回爆撃。十八時半ヨリ式。
九　日　五時半ヨリ飛行場。町爆撃。（ロケット・時限）カーチス・グラマン百機十数回。町ハ数ヶ所炎上。
十　日　洞窟掘リヲ続ク。雨天。二ー三回数キデ爆撃。
二十五日　農耕。
二十六日　午前舟整。十三時ー十六時学科。午后縄造り。
二十七日　午前衛生法・救急法ノ復習。午后機関学科。
二十八日　午前戦斗計画。午后内務検査。
二十九日　六時半ヨリ遥拝式。七時ー十六時加賀見舞。
三十日　舟整。

五　月

一　日　午前海洋氣象。午后整備。
二　日　午前舟整。（清水通シ）午后芋植工。
三　日　午前舟整。午后機関学科。十六号艇分解。夜間芋植工。
四　日　午前海洋氣象（海図ノ見方）。午后機関ノ学科。十一時四十五分西方B2・C5・D5・他6通過。十二時十五分ヨリ四十五分マデ三百八十発。主ニ飛行場砲撃。乙号戦備発。
五　日　六時㊀解除。午前内ム令。午后入浴。整備。

十八日ヨリ二十七日マデ那覇附近（一日夜）B又ハC1・C4・D2・T2・不15（A2）沈。ACI・B5・B又ハC3・C5・D2・大型T1・T5・不16破。水上特攻、沈D2・T3　大破T2・不一。沈不4。神風T4。

六　日　休ム。

七　日　午前舟整。（グリス・オイル注入・錆取り）二十時マデ農耕。

八　日　環境整理。午后舟整。

九　日　午前舟整・環境整理。午后農耕。

十　日　午前水路視察。芋植工。午后舟整。十六時ヨリ農耕。

十一日　午前内ム令。午后舟整。

十二日　午前農耕。（上野看護）午后舟整。

十三日　午前休養。午后貝取り。十六時半ヨリ農耕。

十四日　十時マデ舟整。擬装。午后十四時マデ防毒面手入。以后バッタ取リ。

十五日　食当。午前環境整理及芋苗取リ。午后農耕。

十六日　午前戦斗計画。十時マデ機関教育。入浴。

十七日　午前舟整。

十八日　午前防毒面ノ操法。午后入浴当番。雨天ナルタメ数名ノミ。

十九日　午前内務実施。十一時三十分第三洞窟落盤。午后生息設ビ。

二十日　身辺整理。生息設備。十八時半ヨリ告別式。

二十一日　生息設備及被服ノ乾燥。

二十二日　生息設備。環境整理。午前一時間ガス防護学科。

二十三日　午前戦斗計画テスト。午后農耕。一部デ小屋造り。

二十四日　舟整。一部デ小屋造り。午后舟艇検査。

二十五日　午前ガス防護学科。午后機関教育。

二十六日　午前舟艇整備。午后機関教育（分解手入）

情報＝那覇北・中飛行場友軍空挺部隊。

二十七日　休ム。貝取り。草履造り。

二十八日　午前機関分解。北・中飛行場完全制圧。空母十数隻ノ大部隊ハ特攻隊ニヨリ散々トナル。

二十九日　午前機関ノ手入（分解）。午后貝取り（アナゴ二匹）十八時ヨリ農耕。

三十日　海図ノ説明。貝取り。農耕。

三十一日　舟整。午后貝取り。入浴。第一陣地ヘロケット弾。食当。

六月

一　日　対日行動学科及小屋建テ。附近ノ陣地爆撃。

情報＝未明ヨリ九時ニ至ルマデ敵落下傘部隊来ル公算大ナリ。

二　日　午前兵器検査。午后再検査（十六時ヨリ）乙号戦備発。

三　日　休ム。環境ノ整理。（豊部隊付）

四　日　舟整（電氣系統・燃料系統）十六時ヨリ農耕除草。食当。敵機ナシ。雨強シ。

五　日　十五時マデ舟整。十六時ヨリ農耕・除草・芋植。イラベ移駐。二十時甲号戦備演習。二十二時三十分非常呼集。

六　日　四時就床。午前休ム。十五時マデ舟整。以后洗濯。

七　日　舟艇整備（錆取り・モーター分解手入）。二十時ヨリ入浴。

情報＝敵二百隻以上地上セリ。

八　日　九時ヨリ奉読式。午后精神訓話（必勝ノ信念）。
以后被服手入。
九　日　九時ヨリ被服検査。以后手入・整理。草履造り。
情報＝敵輸送船。百五十隻本島附近ニアリ。
十　日　休ム。
情報＝敵、首里南方四キロニ来ル。
五月中、本土来襲機数五八〇〇。（大隊炊事トナル）
十一日　舟整（点火時期ノ調整・錆取り）。十八時ヨリ入浴。
十二日　午前兵器手入保存教育。午后農耕。
十三日　午前内ム令。一部芋苗取り。午后時局問答。十七時農耕。
十四日　八時～二十時（雑草取り・中耕）
十五日　午前休ム。午后農耕。食当。
十六日　午前？蒿畑耕シタ后、各畑ノ芋植工。水泳。
十七日　草取り。腸悪ク三食絶食。十九時診断ヲ受ク。
十八日　舟艇整備。島尻農耕ハ一時取止メ。
正午情報＝敵機動部隊ハ宮古島東南ヨリ通過シツヽアリ。我部隊ハ艦砲射撃ニ対應スル準備ヲスベシ。
十九日　舟整。夜ハ島尻ニ防空壕掘リ。
情報＝友軍機偵察ニヨバレB2・C2・D10・T12ガ東方百五十キロ及北々東ニ輸送船団アリ、厳戒ヲ要ス。又島民ニ知ラスベカラズ。
二十日　午后機関ノ部品手入。一部夜間農耕。（那覇玉砕）
二十一日　八時ヨリ一品検査（拳銃）。戦斗計画。モールス。
二十二日　舟艇整備（電纜ノゴム巻キ）夜間農耕。
二十三日　午前就寝。午后兵器・被服ノ手入。
二十四日　全休ム。二十時ヨリ農耕（八名）朝数十機爆撃。
二十五日　舟整。中国・四国・東海ノ一部ニB29三百八十機。（呉空襲）二十四時頃ヨリ一時間月喰。夜間爆撃一部銃撃。
二十六日　八時半ヨリ松林デ体操。午后戦斗計画考査。
十七時頃戦爆五十機来襲。夜一機。
二十七日　午前モールス。午后就床。
二十八日　舟整。午后戦斗計画。二十時～二十四時マデ農耕。
二十九日　午前就床。午后診断（練兵休就床）
三十日　午前礼式令学科。十時半頃湾内デ魚取リ。
午后農耕準備及夜間農耕。（久米島敵上陸）

七月

一　日　休ム。集団長視察。午后濾水器造リ。
二十二時頃一機陣地（炊事附近）ニ銃爆撃。
二　日　舟整。命＝加賀近日中ニ内還ニツキ準備スベシ。
二十三時ヨリ農耕。
三　日　七時ヨリ退避壕掘リ。魚群監視。爆音少シ。
四　日　午前壕掘リ。舟艇転把取付。午后時局問答。空襲ナシ。
五　日　舟艇整備。午后備品検査。
七　日　十八時ヨリ農耕。本日ヨリ深？出席。
八　日　全休ム。干潮時貝・魚取リ。
九　日　午前中電氣系統乾燥。午后始動。
十　日　午前退避壕掘リ。午后厠造リ。農耕草取リ。
十一日　午前十日ニ同ジ。午后米英軍常識学。十八時ヨリ一時間農耕。
十二日　八時ヨリ身体検査。体重四十七キロ。二・九センチ減

（三月ヨリ）午后舟艇整備（始動）。
十三日　米英軍常識（対空挺戦斗）。十三時ヨリ松林内デ体操。雑談。入浴アリ。
十四日　農耕。（医ム室ヨリ練休ナリト）。
十五日　休ム。十五時半ヨリ二十四時島尻農耕。
十六日　午前芋植工。午后舟整。十五時低空偵察（マリーナー）。
十七日　午前英軍戦斗。午后農耕。
十八日　八時ヨリ三種混合注射。一日中就寝。
十九日　舟整。午后農耕。十五時友軍機ラシキモノ三機来リ。一機ハ泊地ニ爆弾投下。
二十日　島尻農耕。風雨強シ。
二十一日　八時ヨリ芋苗取リ及芋植（島尻）。十五時半十六機石垣方向ヨリ池間島上空ヲ通過。
情報＝平・水戸・釜石附近艦砲射撃。
二千機釜石来襲。二百十五機撃墜。
二十二日　農耕。
情報＝附近ニアリシ輸送船団南下（二十時）。
二十三日　九ー十四時島尻農耕。十五時ヨリ始動点検。
二十四日　島尻八ー十六時。十八時頃爆雷破烈。二艇損失。
二十五日　八時ー十八時島尻農耕。午后タルキ採取。
二十六日　八時ヨリ三種混合注射。就寝？？？。
二十七日　八時ー十七時農耕。十二時頃マリーナー強行偵察。
二十八日　八時ー十一時・十六時ヨリ農耕。一部カタツムリ採取。
十四時頃大型機爆撃（十数ヶ爆弾）
二十九日　午前休ム。午后農耕。夜間一機銃撃。
三十日　家庭破壊及農耕。十八時ヨリ魚取リ。
三十一日　昨日ニ同ジ。十四時頃大型機一機イラブ銃撃。入浴。

八月

一日　軍曹及伍長ニ任官シタ。十四時ヨリ兵器被服手入。七時ヨリ申告。十九時ヨリ三時間会食。
二日　午前農耕。午后被服検査準備。
三日　草刈及家屋破壊。
四日　雨。農耕。芋苗取。作業手ハ二十時帰営。（清水市艦砲襲撃）。
五日　午前農耕。午后休ム。
情報＝本月中ニ八千機ヲ那覇ニ集中スル予定。
六日　晴。午前舟整。十五時ヨリ芋掘リ。十六時ー十九時頭痛。
七日　晴時々雨。七ー十一時：十三ー十七時農耕。
八日　奉読式后草刈リ。十九時ヨリ本部デ園芸会。
九日　七ー十三時肥料作リ。十五時ヨリ草刈リ。入浴。
十日　晴時々雨。八ー十三時木材受領。以后検査準備。十五時被服検査。
十一日　農耕。
十二日(日)　午前休養。午后農耕。
十三日　晴時々雨。七ー八時隊長訓話（陸軍大臣ノ布告）午前舟整。午后農耕。コンソリー上空通過。
情報＝二十七日三国申入。八日ソ聯我国ニ対シ宣戦布告。
十四日　晴一時雨。農耕。
情報＝ソ満戦線ハ困難。広島・長崎ニ原子爆弾。
十五日(水)　晴一時雨。農耕。正午数キ上空通過。

十六日(木)　晴。午前二時中隊長殿戦斗終結ノ詔書。
午前舟艇整備。
十七日　晴一時雨。農耕。入浴。
十八日　晴。農耕。入浴。
十九日　晴一時雨。七時半ヨリ大詔奉戴式。午前休ム。
午后家屋破壊及材木運搬。
二十日　晴。午前農耕。午后家屋製作及芋掘。四名入院。
二十一日　晴時々雨。午前芋掘リ。午后農耕及家屋造リ。
二十二日　晴。午前農耕。十四時半ヨリ合同慰霊祭。
十五時半ヨリ五六五六部隊園芸会見学。二十四時帰営。
二十三日　晴。兵舎造リ。農耕。十七時半ヨリ暁部隊ノ園芸会見学。二十三時帰営。東側兵舎ニ移動。
二十四日　晴。堆肥造リ及兵舎造リ。
二十五日　農耕及兵舎造リ。
二十六日(日)
二十七日　晴一時雨。午前農耕。拳銃返納。午后移転（全員）。
二十八日　晴一時雨。八時マデニ辺水。十二時半マデ整備。十四時ヨリ分列式。(16・18・21・23)。他四艇ハ電氣系統ヲ他部隊ニ配当。
二十九日　船整。他部隊ノ将校ノ方ニ？イラブ東浮標大浦。
三十日　昨日ニ同ジ。但演習ニハ出ズ。午后水源地近クノ林出火。
三十一日　前日ト同。午后三名退院ス。

九月

一日　風強シ。前日ト同様ニ群長以下四名池間ヘ魚取リニ行キシモ風雨強キタメ帰ラズ。海岸舟艇引揚。
二日　風雨強シ。池間ヘ大浦ヨリ糧秣運搬。午后芋苗取リ。
三日　風雨強シ。未明上野伍長病死ス。午后ハ兵舎ノ修理改造及蝸牛ノ逃ゲタルモノヲ採取。
四日(火)　農耕。十八時ヨリ寺デ上野軍曹ノ告別式。
五日　農耕。入浴。靴配給アリ。
六日　草刈リ。苗採取。
七日　午前診断（就業）。十四時ヨリ舟整及乗廻ス。
八日　午前芋植工。P38低空デ飛ブ。午后大根播準備。
九日　間？？道路作リ。全休ム。午前魚取リ。
十日　雨。午前休ム。午后農耕。ナス・白鳳豆ヲ植エル準備。
十二日　午前毛布受領及農耕。午后休ム。隊長室ノ電話設。
十三日　午前芋掘リ（25K）。午后舟艇デ船台・トロッコヲ第五桟橋ヘ運ブ。
十四日　午前舟艇返納ナルガ成田ト本部ヘ骨受領。午后環境整理。
十五日　休ム。部隊進駐一周年会食。十八時ヨリ園芸会。
十六日　午前干物場造リ。午后環境ノ整理。
十七日　午前隊長用厠作リ。午后農耕・白菜播キ。
十八日　午前草刈リ。午后草刈リ及舟艇手入。下？？ノ電球取付。
十九日　芋掘。芋植。耕土。
二十二日　午前ハッパデ魚取リ（二十匹）。午后休ム。
二十三日　午前芋掘リ。午后厠造リ。
二十四日　早朝、米T2・CI入港。晝ヨリT1港内ニ入ル。
午后芋掘リ。
二十五日　午前環境ノ整理。午后種播。米軍我兵器ヲ処置。
二十六日　午前芋掘リ（四名）。九時ヨリ寝室検査。午后全員芋

掘リ。
二十七日　午前芋掘リ。将校教育始マル。ダグラス消毒。
十八時ヨリ「カヤ」運搬。午后入浴。
二十八日　八時ヨリ米軍司令官閲兵（キャノン代将）。芋植工。
二十九日　午前芋掘リ。午后三中隊トバレー試合（2:2）
三十日　颱風。休養。十三時ヨリ三十キロ芋掘ル。出欠。

十月

一日　西側兵舎整理及被服調査。四名練成隊入隊。
二日　午前芋掘リ。午后兵舎造り。
三日　休ム。一部小屋造リ。夕方熱発ス。
四日　雨。屋根造リ及茅刈リ。十六時ヨリ材木運搬。
五日　雨。芋掘リ。
六日　晴。午前畝立テ。午后芋掘リ。週番。
七日　晴。休ム。十四時ヨリ発煙筒運搬。十五時ヨリ野球。
八日　雨。午前芋植工。午后被服修理。
九日　雨。休ム。
十日　曇。芋掘リ及耕土。
十一日　晴。耕土。
十三日　午前野球練習及耕土。午后試合（中隊）
十四日(日)　晴。休ム。
十五日　晴。兵舎製造。六名デ晝食持参島尻芋掘リ。
十六日　曇后雨。十時ヨリ身体検査。四・三キロ増。
十七日　曇。午前ゾウリ造リ材料採取。午后芋掘リ。
十八日　晴。中耕及下肥運搬。
十九日　晴。午前馬糞収集。午后自動車部品取リ。
二十日　晴一時雨。午前環境整理。午后舟艇整備。
二十一日(日)舟艇整備。
二十二日　午前木材運搬。午后農耕教育。
二十三日　晴。島尻芋掘リ。開墾。十七時野営。
二十四日　晴。午前芋掘リ。午后芋植工。
二十五日　晴。午前畝立テ。午后学科。
二十六日　晴。午前木炭製造・芋掘リ。十三時ヨリ隊長訓話。
午后小屋造リ。茅運搬及会食。
二十七日　八ー十七時・水会社デ機関整備。
二十八日　晴。休ム。十二時半集合。五六五六ト野球試合。
二十九日　曇後晴。本日ヨリウガイ実施。午前縄製造。
午后農耕教育。十七時ヨリ十九時マデ十一号艇整備。
三十日　晴。草取リ。
三十一日(火)

十一月

一日　午前農耕。午后農耕教育。
二日　七時半集合。各部隊ニ配給スル船ヲ整備シ后運転等ノ教育ヲナス。十五時半十八号艇故障ス。
三日　四時起床。艇ヲ引揚ゲ修理ス。十九時舟ヲ引揚ゲル。
四日　舟艇監視。十九時帰営。
五日　午前環境ノ整理。午后農耕教育。
六日　一部島尻芋掘リ。午前下肥運搬。午后堆肥造リ。
七日　一部島尻芋掘リ。午前廏肥及種子採集。午后ハ新井・渡辺ト電話架設。
八日　雨。芋苗採集。

九　日　午前芋植工（一万本）。午后麦播ノ準備。
十　日　曇。午前芋掘リ。午后寝室清掃及検査。
　夕食ハ三中隊デ会食后演芸会。
十一日　休ム。午前？？？？？。午后野球。カリマタ桟橋。
十二日　曇。東側兵舎ノ防寒設備。午后農耕教育。
十三日　島尻芋掘リ。
十八日(日)　休ム。？？造リ。
十九日　九時ヨリ入浴当番ニ出ル。
二十日　島尻芋掘リ。海防艦入港。
二十一日　島尻芋掘リ。
二十二日　八時半ヨリ身体検査。二・三キロ減。血沈十六。海防艦出。
二十四日　午前診断。午后会食準備。十九時半ヨリ会食。
　二十三時終了。C・T入港。
二十五日(日)休ム。C・T入港。
二十六日　午前芋掘リ及被服返納ノ件注意。午后糧秣受領。
三十日　カリマタヘ中隊長殿ト行ク。二十二時帰営。

十二月

一　日　芋掘リ。正午頃T1入港。
二　日　休ム。午前検便。
三　日　午前環境ノ整理。
十　日　十五時乗船命令下ル。直チニ乗船準備。二十時マデニ大体出発準備完了。出発マデ番号註記。携行証明書印刷。本部伝令及中隊長荷物運搬。
十一日　三時出発。三叉路ヨリトラックデ揚塔所ニ向フ。（五時半）六時三十分小学校前ニ到着。荷物ヲ下シ学校ノ一端ニ集メ休ム。九時船ハ入港。直チニ海岸ニ向ヒ出発。十五時リチャードヘンリー号ニ乗船。荷物及船槽整理（第二ハッチ）
十二日　六時出帆。
十六日　朝ハ伊豆半島及七島ガ見エ、二十時浦賀港ニ入港。
十七日　十九時浦賀桟橋ニ上陸。十九時半ヨリ一キロ行軍。電車駅ヨリ五区程乗リ七百米程行軍。横須賀ノ或旧兵舎ニ入ル。
十八日　環境ノ整理。
十九日　被服返納及受領。出発準備。二十四時消燈。
二十日　六時起床。後発トシテ十時出発（トラックデ）横須賀駅到着。十三時半出発。二十四時岐阜着。

あとがき

最初に述べた様に大変読取りにくい状態となったのは、勿論まともな字や文章でなかったことが一番の原因であるけれども、外に出して持っていたら引揚船の中の検査で必ず取られて仕舞うと考え、バラバラにして靴の底と非常食の乾麺ぽうの袋の中心へ丸めて入れ持って来たためで、鉛筆の芯、つまり黒鉛がすれ合って更に読みにくくなったのだと思う。

又、どうしても解読出来ない箇所は一字毎に？印でしるした。

尚、十九年十月の始め頃から極めて簡単なメモとなったのは、前にも記したように用紙の補給がつかないため急遽思い出したように記入法を変更したからである。